

目 次

序……………中野幸一……………1

I 宇治十帖を読む

一 大君のいのち……………3

(1) 橋姫卷……………4

(2) 権本卷……………10

(3) 総角卷……………24

二 中の君の人生……………52

(1) 早蕨卷以前……………53

(2) 早蕨卷……………55

(3) 宿木卷……………63

三 浮舟

1 形代 …………… 85

(1) 東屋巻以前…………… 85

(2) 東屋巻…………… 95

2 泛う——浮舟巻——…………… 110

(1) 匂宮と浮舟…………… 110

(2) 薫と浮舟…………… 123

(3) ふたたび匂宮と浮舟…………… 127

(4) 浮舟の思い…………… 133

3 再生、あるいは新生…………… 146

(1) 蜻蛉巻…………… 146

(2) 手習巻の初め…………… 151

(3) 再生…………… 161

(4) 棄てた世の中將…………… 167

(5) 出家…………… 177

(6) 夢浮橋巻…………… 198

II さまごまな人、さまごまなこと

一 はつ草の若葉から二条院の女君まで…………… 221

二 「蘭の花」と「月と桂」——夕霧と柏木物語…………… 254

三 月の顔に向ひたるやうなる——落葉の宮物語…………… 288

四 月と死…………… 321

終りに…………… 349

である。

薫は「かの過ぎたまひにけん」人、柏木の世界の気配を感じて、八の宮の世界に誘われる。八の宮の世界には將に弁という老女房がいて秘密の伝授を受けた。

八の宮に心酔して道心の世界を求め、父の世界を求めた薫が、父八の宮の精神を体現した大君と運命的な関係になるのは不思議ではない。大君は罪を背負った薫と共鳴し、その愛と死によって薫を物語の外に連れ去り物語の罪をも運び去る。薫は光源氏の罪を親子二代で背負い、運び去るかのようである。

大君が物語の中でどのように生きたか。俗聖八の宮の姫君としての宇治の暮しから、父宮の死により二人の姫君が厳しい現実に直面する生活へ。薫の求愛により、八の宮の遺言を体して生きる故の強い男性不信にもかかわらず、運命的に生じた薫への愛、その収束として求めた死。

八の宮の世界、宇治の世界を通して、また薫、匂宮との交渉から大君の生きた現実をたどろうと試みる。

(1) 橋姫巻

導入の意味で「橋姫巻」を読むと、ここでは、

(中の君) 容貌なむまことにいとうつくしう、ゆゆしきまでものしたまひける。姫君(大君) は心ばせ静かによしある方にて、見る目もてなしも、気高く心にくきさまぞしたまへる。いたはしくやむごとなき筋はまさりて(橋姫二一、二)

と書かれる。また

琴ならばし、碁打ち、偏つきなどはかなき御遊びわざにつけても、心ばへどもを見たてまつりたまふに、姫君は(大君)、らうらうじく、深く重りかに見えたまふ。若君は(中の君)おほどかにらうたげなるさまして、ものづつみしたるけはひにいとうつくしう(橋姫二二四)

美貌の中の君、性格の大君とまず物語はいう。主人公の薫、匂宮にとってはまだ「宇治の姫君たち」である。

薫は八の宮の世界である宇治を、「法の友」(同二二四)として三年の間訪れる。その間「聖だ